慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	19世紀後半プロイセン領ポーランドにおけるポーランド人民族運動家の経済観
Sub Title	The economic views of Polish activists in Prussian Poland in the second half of the nineteenth century
Author	松家, 仁
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1994
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.87, No.1 (1994. 4) ,p.124- 145
JaLC DOI	10.14991/001.19940401-0124
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19940401-0124

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」87巻1号（1994年4月）

19世紀後半プロイセン領ポーランドにおける ポーランド人民族運動家の経済観

松　家　　仁

1　問　題　設　定

「こうしてわれわれの社会にとって何が必要であるのかということを，理解し知ったのであるからには，もし依然として舵のないまま社会の運命を船に任せ，無関心に船が難破しそうになっているのを眺め，そして腕を組んだまま激しい想像に動揺させられ未熟な思想によって振り回され，結局見事に浅瀬に追い込まれてしまうのを待っていたならば，それは深い罪を犯していることになるであろう。この舵を時に委ねてしまうならば，日々刻々と広範な領域での社会運動に取り返しのつかない損失を後にもたらすことになる。そしてもし，我々［ポーランド人］のジャーナリストによって思慮深いことわざとして何度も薦められてきた『時は金なり』というイギリスのことわざに現実的な意義を付与しようというのであれば，それをまさに現在の状況においてこそ実行に移すべきなのである。というのは，時は金以上のものを，そして何もの以上のものをここでは意味しているのであり，そして時につれてわれわれの国民的な命というものがここでは失われつつあるのだから[1]」

この文章は，1870年にヴィェルコポルスカ地方（ドイツ語では，グロースポーレン，ポーランドの中でもっとも古い地であり，ポーランドが分割・解体された後，ポズナン大公国としてプロイセンに併合された地方，48年革命の敗北以降設置されたポーゼン州とほぼ領域的に一致する）のポーランド人の民族的農民運動を組織したマクスィミリャン・ヤツコフスキが著したパンフレット『われわれの原則，問題そして必要に関する概観[2]』の末尾の部分から引用したものである。この引用されている「時は金なり」ということわざは，ここでは直接経済活動を指すものではなく，国家を失ったポーランド人のプロイセン領における利害を調整するための中央機関として1869年に設立された「プロイセン

（1）　Maksymilian Jackowski（1870a）（以下文献は著作の年号によって示す）　s.62-63：Witold Jakóbczyk（1938）　s.17. も参照せよ。

（2）　Ibid., s.53.

領におけるポーランド人の道徳的利害を支援するための協会」（以下「道徳的利害協会」と略す）という組織（つまりこの引用中の「舵」）の主旨に賛成するために引かれたものであった。しかしこの引用からだけでも，この「時は金なり」ということわざが，当時のプロイセン内部の少数派としてのポーランド人の民族運動やその一部としての経済的な領域における運動の中でスローガンとして利用されていたことが理解されるはずである。また実際この著作の中でも，作者ヤツコフスキは，ポーランド人の勤勉・節約，そしてそれを通じての同国人の経済的な地位の向上の必要性を再々主張している。

ポーランドは18世紀末に3次にわたり近隣の3つの大国によって分割され，それぞれの大国においてポーランド民族は，少数民族として取り扱われていた。政治的・経済的に苦しい立場におかれた彼らは，19世紀後半の中東欧の資本主義の発展の波に巻き込まれた。そこで，当時のポーランドの民族運動家は，民族運動を広げていくと同時に，それを経済的な領域での運動と結び付ける必要をますます強く感じていった。本論でこれから取り扱われる対象は，ドイツ東部諸州研究史上これまでたいてい脇役とされてきた，プロイセン・ドイツ内部の少数民族としてのポーランド人である。とはいえ，プロイセン内部のポーランド人に関するこれまでの研究だけでもきわめて膨大で，それらを概観し整理するだけでも筆者の能力を遙かに越える[(3)]。そこで本論においては，その中でも日本のドイツ史研究者の関心を引きながらもその関心に応じた研究の乏しいポズナン市［ポーゼン市］を中心としたポーランド人の経済活動の中で，ドイツ帝国成立前後の経済観をとりだして簡単に分析することを目標とする。また本論をめぐる細かな歴史的な史実については説明するだけでも本論の紙幅を遙かに越えるので，必要最小限しか触れることができなかった[(4)]。

さて，冒頭に引用した文章のような危機的な認識を彼らが持っていたその理由を知るために，当時の地域経済に関する状況を簡単に示しておこう。ポーゼン州は，プロイセン東部の典型的な後進性の例となるような地域であり，工業化という視点から言えばドイツ帝国の中でも最も後進的な部類に属する地域であった。工業生産は圧倒的な零細性によって特徴づけられ，1875年には従業員5人以下の製造業の占める比率は約83パーセントであった。さらに，ドイツ経済の中でこの州は食糧

（3） ポーランドにおける著作として，ポズナン大学を中心としたグループによる研究が数多くある。代表的な研究者としては，Witold Jakóbczyk, Czesław Łuczak ならびに Lech Trzeciakowski がある。また経済活動に焦点を絞った著作としては，Rudolf Jaworski (1986) が優れている。ドイツにおいても多くの研究者がいるが，その中でもナチス時代の東方研究の一環として数多くの研究がなされている。その代表として，Manfred Laubert (1942) があるが，この著作はプロイセンのポーランド人政策を非難しつつも，その研究姿勢は「息を飲むようなテンポでヴェルサイユのかせをはずせる力を思いがけず獲得した」総統を評価するものである（S. 212-213)。戦後においては Martin Broszat (1972) が入手の容易さなどの点で便利であるが，この時代に関する記述は乏しい。またアメリカの研究には優れたものが多くでている。Richard Blanke, Harry K.Rosenthal そして William W.Hagen (1980) が特に優れている。日本語の著作では伊藤定良（1980)，(1987a)，(1987b)，特に（1987b）が優れている。

庫としての役割を押しつけられ，主要な工業製品と言えば，蒸留業，精糖業であった。一方都市においても，鉄道の開通は西部ドイツの工場制生産に基づく製品の流入をもたらし，そのため地元の職人的な手工業生産の基盤を破壊し，町人階級の没落を引き起こしていた。[5] そのような工業の発展の遅れの中でも，ポーランド人はドイツ人よりもさらに困難な状況の中にあった。一般にドイツ人よりもポーランド人のほうがドイツの信用機関からの信用が得にくくドイツ西部からのドイツ人の流入はポーランド解体以降急速にドイツ人の比率を高め，ポーランド人よりもより多い資本とより優れた技術で，都市をドイツ的な要素で圧倒しつつあった。[6] そのため1861年にはポーランド人の占める都市人口に占める比率はついに32.8パーセントにまで下落し，さらにそれは圧倒的に貧民的な要素を代表しているものにすぎなかった。そして末尾の表にもあるように，ポーゼン州全体でも1871年には61.0パーセントにまで下落していた。[7]

したがって，このような危機感の中で生じた経済観は，ポーランド民族が陥った経済的な危機からいかに脱するか，というきわめて現実的な目的を持っているものであった。[8] そのため純粋な学問的な動機によるのではなく，ポーランド人の間で倹約や貯蓄の意義を広め技術を修得する必要性を説き同じ民族が互いに助け合うべき根拠を示すという，まず実践上の必要性から生じたものであり，それゆえの限界があった。しかしこの認識は，経済的な実践を通じてポーランドとドイツ双方の歴史に影響を与えたものと筆者は考える。つまり，一つには直接にポーランド人の経済活動を刺激するものとして，そしてもう一つはドイツ統一以降反対に成長していったポーランド人の経済的な活

（4） ただし，プロイセン領ポーランドをどのように定義するのか，という問題については簡単に論じておきたい。戦後の人民共和国の歴史記述では，第二次大戦後ドイツから獲得した地域を10世紀前後のポーランド領の「回復」とするのが普通である。Władysław Jan Grabski (1960) ; Gerard Labuda (1971) ; Łuczak (1988) ; Thomas Urban (1933). ドイツ史の標準的な解釈に従って，プロイセンによるポーランド分割以前の国境で定義すると，境界の外側に言語的な少数派がそれぞれとり残される。住民が西スラヴ系統の言語を話すということを基準としても，ウジツァ［ラウジッツ］地方の上下セルブ人［ソルブ人］のみならず，カシューブ人，マズールィ人によって話されていた言語がポーランド語の方言であるかどうか，すなわち民族運動の対象たりうるかどうかという問題をも考慮しなければならなくなる。さらに都市のドイツ人のドイツ文化をドイツへの帰属の根拠とすれば，ドイツの領域は意味をなさないほど拡大する。宗教をその基準としても，カトリックのドイツ人やプロテスタントのポーランド人も当然少数派として存在していた。またユダヤ人についても，通説では，ロシア領とは異なりプロイセン領では移民せずに残ったユダヤ人はドイツ化しつつあったと見なされているが，慎重な取り扱いが必要であろう。そこで，19世紀半ばごろまでの中東欧の農村において近代的な意味でのドイツ国民という概念もポーランド国民という概念も設定しにくく，ポーランド国民のみならずドイツ国民も形成過程にあり，具体的に境界線を引くことは困難だと筆者は考える。

（5） Łuczak (1960) 特に s.28 を参照せよ。

（6） Trzeciakowski (1973) s.12.

（7） 文末の図表は，Hagen (1980) p.324 による。ポーランド人とドイツ人を区分する基準がないのであるから，あくまでも目安である。またこのドイツ人の移入は，中世に遡るものであるから，ドイツ人を侵略者と一まとめにすることはできない。

動に対して，ドイツ人のさらに強硬な民族主義的態度を引き起こしたという2つの段階を経てその後のポーランド・ドイツ双方の国民の歴史に大きな影響を残したのである。

2　経済観の背景

このポズナンにおけるポーランド人の経済活動を支えた経済観に関しては，その学問的な水準の低さが絶えず指摘されてきた。たとえば，ルドルフ・ヤヴォルスキは，その著作の中で次のように述べている，「ワルシャワ・ルヴフ・クラクフといった大学のある街において精緻な経済理論的な見取り図が仕上げられていったのに対して，ヴィェルコポルスカでは，体系的な理論形成や専門的な研究がなかった。［中略］こういった殆ど理論が存在していないという条件の下で，ヴィェルコポルスカにおける国民経済的な思想観の理論史的な議論は必要ない。ポーゼン州の『有機的労働』の代表者たちによって経済的な実践に直接結び付けられている論議は，体系的なものとしてとらえるのではなく，むしろ国民経済的な構造や形態のトポロジーとしてよりよく理解されるのである。この研究の対象には経済理論的な理論構成ではなく，民衆的な水準における国民経済学的な考察という多様な広がりの幅を組み立てていく必要があり，そしてその考察は新聞や雑誌におけるものと同様に集会においても表現されているのである。[9]」したがって，彼のこの著作では彼らの経済活動の実践的な側面に議論が集中し，経済理論自体への関心はあまり見受けられない。

実際，この時代のポーランド人の経済活動をめぐる著作を経済学として捕らえようとするならば，どんな読者も混乱するであろう。いたるところに概念の混乱が見られ，またイギリスの古典派経済学がさかんに引用されるが，それは理論として導入されてはいない。例えば，労働価値説は価値を分析するために議論の対象とされるのではなく，むしろ勤勉と節約を説くための手段として引用される。[10] あるいは，イギリスとフランスの産業競争を論ずるのに，フランスとイギリスの服地のデザ

（8）　通例経済的な領域におけるポーランド人の民族的な運動は，しばしば「有機的労働」（あるいは「実業」）の一部として，労働者階級・土地なし農民の民族運動に対して，ブルジョア階級・聖職者の側のイニシャティヴ維持のための独立を志向しない消極的な対応として評価される。ただしこの評価に立った上でも，実際に後に紹介するこの運動の積極的な宣伝者たちが1863/64年の1月蜂起の参加者たちであり，その敗北を教訓として運動の方針を転換していることにも配慮する必要がある。例えば，後に民衆派の指導者となるシマンスキは1873年に自分も参加していた1月蜂起について「血まみれになって教訓の対価を支払った。」という判断を下している。Roman Szymański (1873a) s.17.また現実に都市の町人階級が土地所有者に対する本格的な脅威として政治の表舞台に登場するのは，19世紀の末である。とはいってもこの時代のポーランドの民族運動家たちが，人口の大多数を占める土地無し農民や農業労働者をその運動の外に置いていたことはきわめて重要な問題をなしている。

（9）　Jaworski (1986) S.36-39. なおヤヴォルスキによると，ヴィェルコポルスカの経済思想については，Zbigniew Zakrzewski, Myśl ekonomiczna w Wielkopolsce. Szkic historyczny do 1939 roku. [w :] *Roczniki ekonomiczne* 20, 1967/68 があるが，残念ながら筆者は未見である。

（10）　実際ヤツコフスキの著作は当時のジャーナリズムでの評判が悪く，専門の農業について書いた方がよいと評価した新聞もあったほどである。Jakóbczyk (1938) s.78.

インが例として挙げられるなど，経済理論への態度は通俗的かつ感性的なものである。

この体系的な理論の欠如の原因として当時から今日に至るまで絶えず挙げられてきたのはポズナンにおける大学の欠如である。大学設置は48年革命以前から要求されていたものであったが，後に大学が48年革命の一つの拠点となり，実際ヴロツワフ［ブレスラウ］大学でポーランド人学生が革命に積極的に参加していたことなどを考えると，プロイセン政府がこの都市に大学を設置することを許可するはずがなかった。[11] しかし，大学の欠如というだけでは学問が発達しない理由にはなりにくいであろう。というのは30年代後半から48年革命の反動に至るまで，ポズナンはポーランドの哲学の拠点であり，多くの哲学者が分割領の各地からこの都市に集まってきていた。ドイツ人のポーランド人に対する迫害という問題も考えられるが，むしろ，経済学に限って考えるべき点は，この都市の民族運動が置かれていた経済的な状況である。

広く知られているように，古典派経済学ならびにその大陸における受容において，経済的な自由は経済学の法則の根拠の一つとされていた。しかしプロイセン領ポーランドにおけるポーランド人の民族闘争の一環としての経済闘争という視点からすれば，ドイツ人も含む経済主体間の自由な競争は，資本量においても，また技術力においても圧倒的に勝るドイツ人の経済的な優越性を理論的に支持するものとはなっても，民族間の競争においてポーランド人の消費者がポーランド側に立つべきだとか，経済的に団結すべきだ，ということを絶対に引き出すことはできない。そこで彼らは，自由競争を越える論理を作り出さざるを得ない立場にあった。[12]

他方，ドイツの国民経済学との関連という視点からいえば，ポーランド人には国家がないのであるから，政府など経済政策の主体がなかった。従って関税政策，通貨政策を軸とした経済学を作り出すための客観的な政治的条件もなく，プロイセンの経済政策の中で受動的に与えられた役割を演ずるよう強制されていた。つまり，政策や貨幣論に重点を置いた西欧の経済学という視点から見て不自然ではない「経済学」の体系を作り出す基盤がそもそもないのである。

ドイツ統一前後のポーランド人も，関税の国民経済に対する意義を十分理解していたのであるが，

---

(11) 人口全体の教育水準という点から言えば，プロイセン領は最も水準が高い分割領であった。Trzeciakowski (1973) s.17, s.282.

(12) もちろん自由競争一般をポーランド人の民族運動家の経済観が否定していなかったことを述べておく必要がある。しばしば彼ら，特に後に触れるロマン・シマンスキを中心とする町人階級の民族運動家たち「民衆派」に対して，彼らが「自らは自らへ」という民族的な経済運動のスローガンを利用して自分たちの階級の利害を全面に押しだしたという評価がなされている。このスローガンはとりわけ，19世紀の最後の十年から第一次大戦までポーランド人商人によって悪用されていたが，運動の指導者はその悪用に対して絶えず警告を発していた。例えば，「ポーランド人は，外国人のところでと同じ程度に優れかつ安いものが買えるときに限って，ポーランド人のところで買うことを自分の義務だと思うように」と条件をつけ，またポーランド人内部での競争をむしろ奨励していた。Trzeciakowski (1964) s.131, Trzeciakowski, (1960) s.41. または，*Pamiętnik Jubileuszowy Towarzystwa Przemysłowego w Poznaniu, 1848-1908* (1908) 所収の Szymański, Hasło ; Swój do swego, s.84-85.

それを自分たちの民族経済の形成に利用できないことも同時に認識していた。そのことを示すのは，後に触れる「民衆派」の民族運動家であるロマン・シマンスキの講演をまとめた『教育と労働で』というパンフレットの次のような言葉である。「長い間を通じて，国家の産業の保護と育成のための国境の税関についてわれわれは全然気が付かなかった。それにようやく気がついたのはスタニスワフ・アウグスト王の時代［1764-1795］の末であった。そのとき民衆は，じっと見つめ，詩人が歌った蜜と乳が流れるポーランドがなぜ滅びねばならなかったのか，ということに気がついたのである。」[13]

そこで，経済学を価格形成や価値論の問題，あるいは経済政策の問題に限られるものとみなすのではなく，そこから，哲学や倫理の問題へと引き上げ，「道徳的な利害」とそれに対応する「物質的な利害」の問題として考えることが，彼らの経済観の主要な課題となった。この試みはイギリス古典派経済学のみならず，サン・シモン主義的な経済学や実証主義など当時フランスにおいて流行していた社会理論，さらにドイツ観念論哲学のポーランドにおける受容の影響を受けるという総合的な方法によって行われた。このように経済学を倫理的なものも含んだものと見なそうという試みは，いわゆる近代経済学成立以前には広く見受けられるものであり，特にフランスにおいては，サン・シモン主義の影響のもとで多くの経済学者が経済学を「物質的利害」と組織の理念に結び付け，人間に関する学問として考えようという志向がとりわけ強く現れていた。プロイセン領のポーランド人の民族運動家たちは，自分たちの経済観を主張するに当たって，ただイギリスの古典派経済学のみならず，それを俗流化したといわれるセイやその後継者たちあるいは「人間の経済学者」と呼ばれるシスモンディなどフランスの経済学者たちを意識して自分たちの経済観を形成していた。また，教育や宗教の問題についても，同様にカトリックであることから，当時のフランスの教皇権をめぐる論争やその産物としての実証主義的な傾向まで，当時のフランス思想の展開をしばしば再現している側面も見受けられる。さらにプロイセン・ドイツの一部なのであるから，ドイツにおける社会科学の発展の影響も受けていることはいうまでもない。

3　経済観の分析

a）　登　場　人　物

彼らの経済観を見る前に，まず登場人物のプロフィールをヤクブチクなど主にポーランドの研究

(13)　Szymański (1873a) s.21.

(14)　ロマン・シマンスキ並びにマクスィミリアン・ヤツコフスキについては，以下の文献による。Polskie Towarzystwo Historyczne, Oddział w Poznaniu, *Wielkopolski słownik biograficzny* (1983) ; Jakóbczyk (1938) ; Jakóbczyk, Maksymilian Jackowski 1815-1905 ; Trzeciakowski, Roman Szymański 1840-1980, [w:] Jakóbczyk (1969) ; Józef Siemianowski (1908). Franciszek Morawski (1909). また加藤房雄 (1990) 311頁。

たちの著作に従って簡単に見ておこう。[14] 冒頭のパンフレットの著者，マクスィミリャン・ヤツコフスキは，1815年10月にシレム［シュリム］付近のスウピャで借地農の子供として生まれ，ポズナンの多くの社会活動家が卒業している，マリヤ・マグタレナ・ギムナジウムで学び，その後シレムで軍務に服し，後にコシチャン［コステン］の近くのトゥルヴィア，シロダ［シュロダ］の農場で新しい農場経営を学んだ。さらに彼は1842年にプロイセン領を離れ，現在ウクライナに属しているポドレ地方で借地農となった。1850年にヴィエルコポルスカに戻り，グニェズノ［グネーゼン］の西のポビェジスカで農場を購入し，1885年までそれを経営した。彼の社会活動は，ヴィエルコポルスカにもどった後，中央農業経営協会という大土地所有者の社会団体に加入し，雑誌『ジェミャニン』に記事を書くことによって始められた。しかし，1863年には，ロシア領で行われた蜂起を支援する組織に加わり逮捕されてしまう。ベルリンでの裁判は，当時のドイツの同情的な雰囲気に支えられ無罪とされ，その後1865年に，中央農業経営協会の本部に加わった。ヤツコフスキは農場経営者でありながら，小土地所有農民のポーランド民族における重要性を深く認識しており，この「道徳的利害協会」への協力もその路線の上でのことであった。この協力のあり方を探ろうとして，彼は冒頭で言及した『われわれの原則，問題そして必要に関する概観』（以下『概観』と略す）ならびにそれが理解されないことから記した第二の著作『われわれの国民的・社会的な欠陥ならびにこれらの改善のための手段』[15]（以下『欠陥』と略す）を著し，後に触れる２つの利害の調整の必要性を主張するのである。ついで1873年に，彼が生涯を捧げることになった「農民サークル」のパトロンとなったこともこの小土地所有農民への支援の必要性を認識していたことから始まっている。この「農民サークル」は，単に農業の新しい経営方法の普及のための小土地所有農民の組織化をめざしたものではなく，また農民の自立並びに彼らのポーランド的な民族的な習慣とカトリシズムの積極的な支援をめざしたものであった。「農民サークル」はすでに1862年に西プロイセンのピャセチュノで始められ，1866年にヴィェルコポルスカ地方へと広がっていた。しかし財政的な理由などからこの運動は，適切な土地所有者の側からの支援を必要としており，その必要に彼が答えたのである。また彼は中産階級のもう一つの構成者である都市の町人階級に対する民族運動の拡大を意図して中産階級向けの雑誌の刊行を企画し，その編集者を探していた。そこで1870年に『社会制度における道徳的な力について』を著した若いジャーナリストであるロマン・シマンスキに出会うのである。[16]

ヤツコフスキは1900年まで「農民サークル」のパトロンとなり，この「農民サークル」は，彼の影響下で30から，200にまで増加した。また彼は農民に農業技術を普及するためにいくつかの雑誌を刊行している。自分の農場経営から引退した後，1905年にポーランドの独立を見る前になくなっている。

他方，ロマン・シマンスキは1840年８月５日にポズナン近郊のコスツシィンで，織工の父と中規

(15) Jackowski (1870b)
(16) Szymański (1870)

模土地所有農民出身の母の間に生まれた。1857年に祖国の文学を学ぶサークルを組織し，マリヤ・マグダレナ・ギムナジウムで1861年に愛国的な秘密結社を組織した。それから1862年に神学校に入学するが，翌年に勃発した1月蜂起に加わり，敗戦後ポズナンに戻った。ヴロツワフ，さらにベルリンとライプチヒで歴史と経済学を学び，1868年に『産業協会の基礎』というパンフレットを著しまたイラスト週刊誌『ソブトカ』やいくつかの新聞の編集に加わった。そのあと1870年に『社会制度における道徳的な力について』（以下『道徳的な力』と略す）を著した。彼がそこでジャーナリズムの重要性を強調したことと，ヤツコフスキの著作を肯定的に自分の著作で引用したことから，彼はヤツコフスキの眼に止まり，そこでヤツコフスキはシマンスキに対して上で述べた町人階級むけの新聞の編集を依頼するのである。『オレンドヴニク』と名付けられたその新聞は，1871年4月に刊行された。しかし，フランスにおけるいわゆる教皇権至上主義と自由主義との対立と同様の対立がプロイセン領ポーランドにも再現されており，その論争の中でヤツコフスキが自由主義の立場に明確に立ったのに対して，シマンスキが視学制度の廃止に対して否定的な態度を取ったことならびに町人階級の政治参加の問題から両者は対立した。ヤツコフスキの原稿をシマンスキが掲載しなかったことから，ついにヤツコフスキが，プロイセン政府に託していた雑誌刊行の保証金を引き上げると主張するまでに至った。そのため1872年からは，シマンスキは独自で新聞を刊行することになった。

その後，ポーランド人にとっては民族抑圧政策であった文化闘争の時代は，自由主義的な土地所有者グループとこの町人階級の指導者の一時的な休戦状態をもたらしたが，その後もシマンスキは都市の商店主や職人などからなる町人階級の指導者として彼らの政治参加を拡大しようという「民衆派」グループをつくった。そしてそのために多くの新聞記事やパンフレットを著している。そのパンフレットの中でも，たとえば1873年5月に，町人階級への技術普及とポーランド民族性の維持のために（途中中断はあるが）1848年から組織されていた「産業協会」で行われた講演を冊子化した『労働と教育で』[17]や，また同年に刊行された教権主義の立場から土地所有貴族の選挙独占を批判した『体系的な選挙運動の指針』[18]などで，彼の1871年以降のポーランド民族運動への立場を知ることができる。さらに彼のカプリヴィ時代のプロイセン政府のポーランド民族運動への融和政策に対してポーランドの民族運動の指導者たちが「和解」と称してすりよって行ったことに痛烈な批判を行い，1893年の選挙では指導者たちが決定したポーランド民族の統一候補に対して自らの組織を動員して立候補し敗北している。ちなみにこの時は，グニェズノ大司教が「和解」派であったことから，聖職者を批判する側に回っている。そのため指導者と教会から「社会主義者」「黒白派」などという非難を浴び，「民衆派」はヤツコフスキから「屑ども」と呼ばれるに至るほど孤立した。しかしカプリヴィの融和政策の時代が終わりその後プロイセン政府により，強烈なポーランド民族の

(17) Szymański (1873a)
(18) Szymański (1873b)

非国民化が一貫して追求されるようになったことは，ポーランド社会内部での対立の主要な原因を奪った。さらにプロイセン領にも国民民主党が登場し，その急速な成長の過程で「民衆派」運動は吸収されてしまった。1906年には『オレンドヴニク』が国民民主党の新聞となり，そして1908年にシマンスキはプロイセン領のポーランド社会内部での中産階級の影響力の拡大を残して死ぬことになる。

さて，文化闘争以降の両者の立場は決定的に異なるが，1870年の彼らの3つの著作（つまり『概観』『欠陥』『道徳的な力』）は，後のポーランド民族の解放闘争の経済観を分析するという目的に限定すれば，際だった本質的な違いは見受けられない。そこで，ひとまず1870年時点での両者の相違点を引き出し根拠づけ，その上で共通点について議論をしていくこととしよう。

b） 相 違 点

この2人は後に，ヤツコフスキは土地所有者として小土地所有農民の育成に生涯を傾け，他方シマンスキは，土地所有貴族の民族運動内部での権力独占を打ち破るための「民衆派」を組織し激しく対立して行くのであるから，当然その違いは，都市と農村への重点のおき方の相違として現れなければならない。

シマンスキが同時代における工業の意義にとりわけ敏感であったのは，さきに触れた『教育と労働で』の別の記述から理解できよう，「もし2年前からポズナン大公国がこうむっているかなりすばやくかつ重要な変化を検討してみるならば，たいしてめざといものでなくとも次のことに気がつくであろう。つまり，我々が，これまでの時代のようにもはや農産物だけによって特徴づけられるのではなく，工業や通商によって特徴づけられる経済的な新時代の前夜に暮らしているのだということを。[19]」「みなさん！町人階級なしの社会というものは－つまり固有な産業と商業なしの社会というものは－正常な結合に立脚している有機体であることをやめてしまう－つまり残骸，廃墟になってしまうのです。[20]」

両者の対立が明確になる以前においても，シマンスキがこの圧倒的な農業地域において，都市の意義を重視していたことは，次のことから理解されよう。当時の大土地所有貴族が，農民の他地域への移住問題に対して強く関心を持っていたのに対して，彼はとりわけ，都市のポーランド人の移住の問題のほうが重要であるとしていた。彼は，農村からの移民にポーランドのジャーナリズムが多く警告を発していることに言及しながら，『道徳的な力』で都市からの移民について次のように提起している。「都市からの移民と農村からの移民には形式的な違いがあるだけなのだと考えていて，都市から移民していく光景にわれわれが無関心であるのにぞっとする，というのはその形式的

(19) Szymański (1873a) s.25.
(20) Ibid., s.26.
(21) Szymański (1870) s.96.

な違いとは，農村の住民はふつうの道を通って祖国の地を離れて行くのであるが，都市の住民は―セイの表現を使えば―『死の門』を通ってたいてい出て行くのであるから。[21]」そしてドイツ的な要素が都市において強まっていくことに警告を発し，このpericulum in moraに対して物質的な側面からだけではなく，道徳的な側面から特に都市の住民に対して支援することを主張した。[22]

シマンスキのこの主張のもう一つの根拠は，まずすでに「農民サークル」が存在し，それがポーランド語の農民図書館の拡大にも努力していることから，農村における利害の支援は支援するものが決まっていること，また農民は受動的であり保守的であるので「すぐに民族的な特徴を失ってしまうことはない[23]」が，都市では支援するものが限られており，また都市住民は非ポーランド的な文化の影響を受けやすいということをも挙げている。

農業地方であることに加えて，零細工業中心でその工業もおもにドイツ人とユダヤ人が支配的であったポーゼン州において民族闘争の主要な舞台として都市を考え，その歴史的な意義を強調するというのは，実践的な戦略として奇妙なことに思われるが，当然同時代の工業を悪とはせず，その優れた側面を生かして社会問題を組織的に解決していこうとしたフランスの経済学の発展と彼らが密接な関係を持っていたことをこれは示しているといえよう。

この点について他方ヤツコフスキは，『概観』で西欧の経済学者であるJ．S．ミルやJ．-B．セイを引用しつつ，素朴に，主な国民的な富を強化する源泉とは生産であり，その要因は人口すなわち労働，土地，資本で，人口は土地と資本と緊密で相互的な関係にあり，この基盤の均衡は国民的な富の主要な条件である，としている。そして自然のたまものを労働という努力を通じて得ることができる等々と述べてから資本が以前の労働の産物であることを強調し，勤勉の必要性を論ずることになる。[24]

しかしポーランドの具体的な問題を触れるときには，農業問題に主要な関心があったということが現れてくる。『概観』が実証主義や古典派経済学などの寄せ集めで退屈であるのに対して，『概観』が世間から相手にされずその不満をぶつけて書いた『欠陥』は，ポーランドの現状に至るまでの分析に富んでおり，そして議論の焦点もよりポーランドの現実に沿った農業問題に移っている。彼は農業を文明が基づく基礎とみなしながら[25]組織され始めた農民サークルのような組織の意義を評価している。またポーランドの歴史を遡りながら，隷農制の成立がポーランドの農民の地位を落としめ，それによって労働の精神をだめにし，ポーランドが国家を失う原因の一つになったと，激しく土地所有貴族の富への欲望を非難し，土地所有農民の労働への道徳を高く評価している。

上の説明からも，相違点としてさきに触れた両者の関心の違いが理解されるであろう。つまり，

---

(22) Ibid., s.103-104.
(23) Ibid., s.104.
(24) Jackowski (1870a) s.45-50.
(25) Jackowski (1870b) s.56, s.61.

シマンスキが特に都市の町人階級に重点をおき議論を進めようとしたのに対して，ヤツコフスキはポーランドの現状に沿って土地所有農民のポーランド人社会における意義に重点を置いていた，ということである。そしてともに西欧の経済学を取り入れながら，どのように共通の現実の問題を解釈するかという努力を行ったのであるから，次に以下双方の経済観をいくつかの論点に沿ってまとめて扱うことにしよう。

c）　2つの利害と生産，ロマン主義との関係

ここで取り上げられた3つの著作は，冒頭で述べたように，ポーランド人の民族運動において「道徳的利害」を調節するために1869年にイグナツィ・ウィスコフスキによて組織された「道徳的利害協会[26]」の活動の課題をめぐって著されたものである。この「道徳的利害」ならびにそれに対応する経済活動を指す「物質的利害」というものはいったい何を指すものであるのか，詳しい説明が必要である。

まずこの2つの語について彼ら自身の説明を引用することにしよう。ヤツコフスキは『概観』の中でこのように述べている，「個人と同様に集団も，自分の道徳的および物質的な利害を持っている。国の道徳的な利害とはすなわち宗教・教育・普通教育・出版・美学である。国の物質的な利害とは生産・消費・租税・農業・商業・財政などである。独立した政治的な存在を享受している国においては，政府は自分の行政制度を導入して，国の物質的な利害も道徳的な利害も監視することが出来る。［中略］我々の社会は，国家の滅亡によって有機体全体が激しい打撃を受け，固有の社会的な行政制度を持っていない。しかしながら，物質的な利害を農業協会や産業協会，信用組織，貯蓄金庫によって部分的には代替することができる。けれども物質的な利害の魂である道徳的な利害は，宗教と初等教育に関する限りは何とか教会が代わりをつとめているが，残りの道徳的利害は運命にゆだねられてしまっている[27]。」

この文章を受けてシマンスキは『道徳的な力』で次のように述べている。「この［2つの利害へ

(26)　この団体　Towarzystwo ku Wspieraniu Moralnych Interesów は，教育水準の引き上げやジャーナリズムを通じてドイツ・ポーランドの両民族に対し，文明の進歩並びにポーランド民族の同権のための努力を行うことを目標としていたが，その目標の曖昧さから，何もできずにそのまま自然死を迎えた。Jakóbczyk (1938) s.52.ならびに　Trzeciakowski (1973) s.81. またこの団体の具体的な規約については，Szymański,(1870a) s.84-86. を参照せよ。ウィスコフスキは蜂起によるのでもなく，静観主義によるのでもない中間の組織によるポーランドの民族性の防衛の方法をプロイセン領で定式化した最初の人物である。しかし彼の著作，Ignacy Łyskowski, *Rzecz o Towarzystwie Moralnych Interessów Ludności Polskiej pod Panowaniem Pruskim*, Poznań, 1869 は，残念ながら利用できなかった。

(27)　Jackowski (1870a) s.22-23.『欠陥』によれば，ヤツコフスキのこの道徳的利害の支持のための「組織」については，すでに彼が7歳の時にその必要性を確信していたという。Jackowski (1870b) s.278, Jakóbczyk (1938) s.64.ヤクブチクは，彼の思想の起源を外国に求めるべきではないとし，ポーランドの類似の社会団体の運動の歴史に起源を求めている。

の］分割が根拠がないものとは言えないが，とはいえわれわれの考えでは，上の分類では道徳的な利害の概念が余りにも漠然としているし，そしてその成果は不明瞭なままだ。[28]」このようにシマンスキは述べ，この2つの利害を自分なりにより細かく分析し始める。

まずどちらの利害が規定的なのか，という問題について見てみよう。この点についてシマンスキは，道徳的な利害が物質的な利害よりも上であると明確に主張している。[29]つまり教育や信仰が深く民族の間に広まることを通じて，民族的な魂を持った人間の知的な能力が開花し労働の能力が高まるのであるから，前提として道徳的な力が国民的な富には必要だというわけである。[30]そこで，社会のより教育に恵まれない階層や女性にまで教育を広げることが，まさに物質的な力を高めるためにもそして社会全体の利益のためにも必要なこととされる。彼は，J．S．ミルやロッシャー，シュヴァリエあるいはロシア領の実証主義的な経済学者であるユゼフ・スピンスキなどの名前を挙げながら，[31]19世紀の経済学が財から人間の分析に重点を移しつつあるとして彼の理論を補強し，そして問題となっている「道徳的利害協会」の課題を考える。しかしここで西欧の経済理論と区別される点があることにも同時に注意しなければならない。それはすなわち，その道徳的な力は民族的な方向で育てなければならない，ということが非常に強調されていることである。もちろんこれは，プロイセンに侵略されドイツ語による教育が行われる機会が増加しポーランド人にとって母国語で職業教育を受けることが困難になっていたことに原因がある。

ヤツコフスキは，この民族的な性格の維持・強化ということについて，もっと明白に述べている。彼は『欠陥』で文明の道徳的な側面の主要な重要性の一つには市民的な精神と労働の精神があるとしながら，[32]やはり教育の重要性を指摘している。そして実証主義的なやり方でポーランド国内のイェズイット派による教育を鋭く批判しながら，その批判の根拠に国民的な性格がなく，「市民的な魂と労働の基礎を破壊した」と断言している。[33]

道徳的な利害が物質的な力を強化し，その結果国民的な富が現れるのであるから，経済活動全体がこの視点からすれば単なる物質的な利害によるものではなく，ふたつの利害の作用の結果となる。ドイツでは，公式論的なアダム・スミス解釈と官房学派に反対するものとして，アダム・ミュラー

---

(28) Szymański (1870) s.12.

(29) Ibid., s.76.

(30) 関心を引くのは，シマンスキがアダム・スミスの『諸国民の富』の冒頭の3節を引用してこう注釈していることである，「しかしながら天才的なスコットランド人にとって思われたほどこの二つの事情は別のものではないのである。というのは，もし熟練，技巧及び判断が適切な教育に左右されるとしたら，第二の事情，つまり有用労働に従事している国民の人口比率の多寡の程度もまた，この同じ原因に左右されることになる。」Szymański (1870) s.29.

(31) Ibid., s.80-81.

(32) Jackowski (1870b) s.27.

(33) Ibid., s.51.

(34) アダム・ミュラーについては，トマス・リハ　原田・田村・内田訳（1992）88-91頁

などによってこのような2つの利害によって組織された有機体的な社会観が形成された。[34] しかし，ポーランドにおいては，ポズナンに集まった多くの哲学者，社会思想家たちが，このような有機体的な社会観に基づいた議論を行っていた。その中でもアウグスト・チェシコフスキは，48年革命直前にパリで匿名で出版された著作である『我らの父よ』の中で社会を有機体とみなす考えを示しそしてそれとロマン主義的な考えを結び付けている。[35] そして彼は，実際48年革命前後，彼や他の哲学者たちはポズナンを中心とする地域でポーランド人の民族運動の担い手となっていた。その後に現れ，この哲学者たちの社会活動を引き継いだのが，ここで述べている70年代の民族運動家たちなのであるから，このような社会有機体的な考えを彼らが受け継いだと考えるのは自然であろう。また，ロマン主義対実証主義というロシア領の考えが，そのままプロイセン領に適用できないということも指摘して置く必要があろう。

1870年代のポズナンの民族運動家の社会観がロマン主義的な哲学者の影響を受けていたとしても，ポーランド民族の歴史的な使命という考えは，危機に直面している現状を目の当たりにしてそのまま受け入れることができるようなものではなかった。冒頭に引用したヤツコフスキの文に見られるように，この時代の民族運動家たちはポーランド民族が滅びる可能性を絶えず意識していた。シマンスキにおいても次のような一節が見受けられる，「自分たちを直視しよう。我々のシロンスクはすでにドイツ化されてしまったし西プロイセンも外国の民族性で，随所に傷つけられている。［ポズナン］大公国の西方の郡の境界もドイツ人が満ち溢れている。時につれてこの民族がポズナン大公国の他の領域に満ち溢れないのだと誰が約束できようか。[36]」あるいは「誰かが我々に尋ねるかも知れない，－我々に歴史的な権利がどこかにあるのでは，そして我々の祖先が9世紀の間の政治的な存在を通じてその権利を残してくれたのでは，と。祖先とこれと何の関係があろうか。［中略］シミが食い散らかす羊皮紙も，歴史の流れとともに崩れ去っていく誓いも，生きている社会にとっては何の保証にもならない。むしろ否定できない明白に表明された，命そのものという事実に基づいた生存権こそが命を約束してくれるのだ。[37]」

しかし彼らが，これまで滅亡したほかの民族と同様の運命をポーランド民族がたどるかも知れないと意識し，独立を求めない日常的な経済活動の実践に勢力を傾注したからといって，その考えをロマン主義から完全に離れているものと評価するのも困難である。むしろ彼らは，本来のあるべき民族の姿というものを理念的に設定し，民族の危機へと落ち込んだのはポーランド民族がこの理念から外れたことに原因があると考えていた。ヤツコフスキは，この滅亡の危機の原因を次のような因果関係で考えている。すなわちシラフタが外国へと穀物を有利に輸出するために農民の自由を削

(35) チェシコフスキなど1840年代のポズナンの哲学者については，Andrzej Walicki (1982), (1986) ならびに André Liebich (1979), Tomasz Kizwalter i Jerzy Skowronek (1988) s.116-120 を参照せよ。

(36) Szymański (1870) s.2.

(37) Ibid., s.6.

減していったことが，農民の勤勉さを阻害しそれゆえに，彼らの愛国心が失われたのであるとした。つまりその本来の勤勉さや献身によって特徴づけられていたポーランド民族の性格という理念からシラフタが外れていったことに，その危機の出発点があったとするのである。そして彼は次のように述べる，「われわれがすでに見たように，最初の国民的な思想からのずれという罪が国民にあたかも原罪であるかのように，深刻な重みを持っているのだ。そして，それを中心に多くの悪がいろいろな時代にこれまで結び付いてきたのである。」[38]

他方，シマンスキとロマン主義の関係はより明白である。彼は，後の彼の見解とは180度異なった形で土地所有階級の指導的な役割を積極的に評価している。農村における道徳的な利害の支持の必要性から農村での小学校の設立をさらに進めることを提案しながら彼は次のように述べる，「もし道徳的な力がただ人間の中にだけ宿り，農民の教育が我々の社会的課題の最も重要な一つであるならば，最も大きな民族的な富が存在しているこの人間を幼いときから大事に育てなければならない。［中略］かつてレントの時代には，小農民が大土地所有者に緩くではあったとしても従属していた時代には，両者の間には家父長的な関係が作り上げられていた。時が経つにつれて，ますますこの以前の関係の記憶が薄れていってしまい，とうとうこの関係については今日村の長老しか覚えていない。もし領主館や邸宅に住んでいる領主夫妻がいつも彼らのことを気遣い彼らについてよく知り理解しようとしてきたということを，最もそれにふさわしい世代であるしなやかな感性を持つ学校の子供たちの心に感じさせそして教え込まなかったとしたら，これからの世代はこのような昔のことを知るよしもないだろうし，この弱い絆は崩れさってしまうであろう。」[39] あるいは次のようにも述べている「土地所有市民の物質的な没落は全体の損失であり，彼の財産に対してかけられる競売とは我々の民族性の競売の一部なのであり［中略］彼らの没落とともに我々が滅びるのである。」[40] つまり，現実の危機を直視する方向へと移行しつつも，シスモンディを想起させるような過去の素朴な時代への郷愁を共通項として，純粋な実証主義では解釈できないものがプロイセン領では独特の民族闘争の視点を作り出していたのである。

d）　ボイコットと社会団体の意義

あい争いあうふたつの民族が一つの領域を分け合っているという特殊なこの地域の状況に規定されて重要な意義を持つのは，まず量的な民族の規模の問題，すなわち民族別の人口比率である。ポーランド語を話すカトリックの人口が経済的ならびに文化的な民族運動を支える基礎なのであるから，この人口の強調は当然であり，ゆえに当時のポーランドの新聞などにおいていかにポーランド

(38)　Jackowski (1870b) s.21.
(39)　Szymański (1870) s.39-40.
(40)　Ibid., s.35.
(41)　Ibid., s.95-107.

民族の数を増加させそして移民を防止するか，ということがきわめて頻繁に取り上げられている。[41]

その上で，量的に優勢に立ったとしてもポーランド人が全体としてドイツ人に屈してしまっては無意味なのであるから，増加した人口の中にポーランド民族の有機体の健全性というものを維持する必要がある。健全な有機体とは，先に引用したシマンスキの議論にあったように町人階級や農民なしではあり得ず，彼らの活発な経済活動をその前提の一つとしている。またヤツコフスキも『概観』で，都市のポーランド人職人を支援する必要について，次のように論じている。「ユダヤ人を観察し例にとってみよう。ユダヤ人はユダヤ人だけを支えているのだ。そしてこの結びつきと一致が，彼らにこれほどの物質的な豊かさをもたらしたのであり，迫害があるにも関わらずその豊かさはうまくやって行ける程度にまでなっている（私はこれを通じてユダヤ人の性格の悪い諸側面を持ち上げようというのではない）。私は結びつきと相互の支え合いについて述べているのである。［中略］人口は国民的な富の主要な原因である。したがって民族の人口なしでは，国民の富はあり得ない。[42]」また『欠陥』では，ドイツ人やユダヤ人のところで購入することは敵に対して資本を与えていることなのであり，それを防ぐために職人や商人により良くさらに安い商品を供給できるように援助をすべきであると主張している。[43] 特定の民族に属する職人や商人を，その民族性を基準にして支援すべきであると主張することは，価格や販売する性質という物質的な利害に関わる基準のみによって経済的な行動が決定されない，ということを意味している。すなわちここでも道徳的利害の物質的な利害に対する優越をみることができよう。

この，ポーランド人はドイツ人の商店よりもポーランド人の商店を利用すべきであるという宣伝は単に経済的な民族運動の活動家によって主張されたのみならず，以前からドイツ人商店のボイコット運動という形態をとって現れていた。この運動は，現実にはドイツ人商店でしか手に入らないものがあったり，価格や品質の面でドイツ人と同等のものをポーランド人商店が提供できなかったりして必ずしもそのままの形で実現したわけではなかった。ボイコット運動は，1848年革命の時ヴィェルコポルスカ地方の民族的な再編計画にドイツ人が反対運動を起こし，それに向けられたポーランド人の反感に起源を有するものであったが，ポーランドの民族運動家たちはそれに民族の健全な有機体を守るために必要であるという根拠をこうしてつけ加えていたのである。

ポーランド人商人・職人のもとでの購買の促進と並んで，もう一つの道徳的利害による物質的利害の調整の手段は社会団体[44]である。有機体的な社会観には国家よりも社会団体の器官としての意義を重視する側面があり，その点ではこの社会観は国家を失ったポーランド人の民族運動家たちにと

(42) Jackowski (1870a) s.56.

(43) Jackowski (1870b) s.60. ポーランド人のドイツ人商店ボイコットの成果ならびに限界については，Łuczak (1960) s.71, Trzeciakowski (1964) s.110-111, s.125-135.

(44) シマンスキは，towarzystwo というポーランド語と同義のものとしてフランス語からの外来語である asocyacya という語を用いている。従って以下の議論をアソシアシオンという概念が中東欧世界に与えた影響として解釈することもできよう。Szymański (1870) s.49.

っても現実的な思想となりえた。けれどもその社会観の中で国家は全体の利害を調整する役割が期待されており，その必要性は後進国であればあるほど深刻に認識されるものであった。ドイツにおける国家有機体説が政治的な条件のもとで国民経済学に変容することが出来たのに対して，ポーランド人にはその国家はドイツ人とロシア人によって奪われたままであった。そのため国家の役割を強調する同時代のドイツの経済学をそのまま受容することは不可能であり，ポーランド人は国家に代替する政治組織をドイツ社会内部で作り出す試みを繰り返すしかなかった。そういった試みとして，不平等な選挙制度のもとでもポーランド人の投票を集中させ当選させるための組織である選挙機関[45]や「道徳的利害協会」など，数多くの社会団体の設立が追求されたのである。

この社会団体の意義は，すでに48年革命以前からプロイセン領ポーランドにおいて認識されていた。例えば，さきに触れたチェシコフスキも，1843年に，『ポズナン大公国における知的な労働と志向を結び付けることについて』というパンフレットで社会団体の必要性を明確に論じている[46]。また，カロル・マルチンコフスキがポーランド人の奨学団体を組織したのは1841年である。こういった組織の必要性が広く社会に受け入れられていたことを示しているのは，48年革命時に出現したポーランド人連盟であった。この組織はプロイセン領内でのポーランド人を結集しようという試みであったが，1850年頃に政府によって強制的に解散させられている。

このようなプロイセン領の民族運動の伝統を背景に，48年革命以後の抑圧に伴う沈滞状態を経て，ドイツ統一前後には多くの社会団体が再び組織され始めていた。例えば先に述べた農民サークルのほかにも，経済的な社会団体としては都市の町人階級に対象を絞った産業協会[47]が革命後の沈滞から活動を活発化させ，それに併設する形で1861年には「産業家のための貯蓄協会」が組織され，貯蓄組合の連合も進んでいた。またポズナンには青年産業家協会が組織され，書籍を普及させるための書籍サークルの試みもなされていた[48]。

さて，このような社会団体の意義は，どのように1870年前後に考えられていたのであろうか。シマンスキはバスティアの名を挙げつつ，西欧における社会団体の運動理論に触れながら次のようにまったく実証主義的なやり方で説明している。まず彼は，資本主義が「資本の貴族社会[49]」を産みだし，それは富の不平等な分配を平等な分配を平等にすべきだという社会主義者の理論を出現させたが，1848年の革命がこの理論の虚偽性と有害さを暴露し社会主義者はもうじき滅び去るであろうと

(45) 選挙機関については Trzeciakowski (1960) s.19-21. を参照せよ。

(46) Kizwalter i Skowronek (1988) s.118.

(47) 原語は Towarzystwo Przemysłowe である。この Przemysł という単語を本論文では，原則として「産業」と訳しているが，この語はヤヴォルスキがドイツ語の Gewerbe と Industrie の両方の意味がある，と述べているように，多義的な語であるので注意する必要がある。Jaworski (1986) S. 66.

(48) Trzeciakowski (1973) s.75-82.

(49) Szymański (1870) s.41.

述べている。しかし社会主義者が滅びてもその後には社会団体の理念が残されたのであり，その理念は，社会主義者のように個人的な利害を相互の搾取の原因として有害なものとみなすのではなく，個人的な利害を労働の刺激とし助け合いを原則とするものであり，社会問題の解決の最終的な鍵になるだろう，というのである。このような考えに基づけば，これまでのポーランドの社会団体は，有害な社会主義や蜂起と結びつく革命主義の団体とそうでない健全なものとに区分されることになる。そしてシマンスキは不自然なことに1848年革命前のロマン主義によって特徴づけられる，両者の区別がはっきりしない時代にまでその区分をさかのぼらせ，彼の『教育と労働で』では革命的な試みを激しく非難している。[50]

もちろん社会の利害の複雑さに応じて多くの社会団体が組織され，また団体の目的はもちろんいろいろなものであり得る。しかしシマンスキは，社会の利害に従って重要なものとそうでないものがあると主張する。つまり生産的なものとよりその度合いが低いものである。しかし経済闘争という視点から彼は，宗教的な目的を持つものや慈善団体よりも少女のための奨学金協会の方がはるかに重要なものであると考えていた。[51]

これらの社会団体はどのような原理で運営されていたのであろうか。道徳的利害協会の「規約説明」が，シマンスキの『道徳的な力』に掲載されているが，それによれば，協会の仕事は外部と内部の2つに分割されるという。外部に対する仕事としては，ポーランド人の民族性がドイツ人のそれと同等のものとして広く認められることを目的とした宣伝活動が挙げられている。他方，内部に対する仕事として次の4つの支援の対象が挙げられている。すなわち，ポーランド語の普及のための出版活動，教育や倹約を目的とする社会団体，職人の若者の職業教育団体，農村における保育園である。そしてその支援を行うものとして挙げられているのが，農村の土地所有者，裕福な人々そしてインテリゲンツィアである。[52]

ここからうかがえるのは，社会の指導者層が資金と理念を提供し，その上で社会の広範な大衆を有機体として組織していこうという発想である。道徳的利害協会は短期間で活動を停止したので，その活動を論ずることは出来ないが，他の社会団体の活動からもこの考えは見受けられる。先に触れた産業協会は，都市の職人階級を組織したものであるが，その活動も単に職業的な技術の普及（もちろんこれはポーランド民族の経済的な実力の向上に役立つものであるが）だけを目的としたものではなく，祖国の文学や歴史，そして時事問題をテーマとした集会活動などを通じたポーランド人の親睦組織としての側面を持っていた。そして時代はずれるが1908年の産業協会の60周年記念文集[53]には，この団体の会員名簿が掲載されているが，それによれば，会員の職業構成は明らかに異なる2

(50) Szymański (1873a) s.18-19.
(51) Szymański (1870) s.50-52.
(52) Ibid., s.85-86.
(53) *Pamiętnik jubileuszowy Towarzystwa Przemysłowego w Poznaniu* (1908), s.102-104.

つのグループから成り立っている。すなわち，職人や商工業者たちと，ポーランド社会の指導層つまり土地所有貴族や工場支配人そしてインテリゲンツィアである。そして後者は講演会の講演者や会報の寄稿者として，そして資金的な後援者としてこの社会団体の活動に加わっていた。

シマンスキとヤツコフスキが（後には互いに対立しながら）それぞれ町人階級と土地所有農民に対して行った活動は，道徳的利害の中でも，とりわけ職業教育と愛国心を中産階級の間に広げることに捧げられ，それは本論の課題ではないが非常な実践的な成功を収めた。社会団体ではないが，シマンスキのジャーナリストとしての活動も目的は一致しているだろう。そしてこの有機体としての民族という概念に基づいた社会団体に関する理念は，これらの組織の実践活動を通してポーランド民族の経済力を引き上げるのに役だった。例えば，貯蓄金庫にポーランド人農民や西部ドイツへの出稼ぎ労働者の収入を集中し，それを農地の購入に用いることは，ドイツ当局による後のドイツ人農民の植民活動に対する有効な対抗策となった。また都市も含めた民族の団結と一致を宣伝することは，ポーランド人商人や職人が経済的に没落してしまうことを予防し，ドイツ人とユダヤ人の経済的な全面的支配を揺るがした。このような点で，後のポーランド社会の発展に対して彼らの経済観の肯定的な側面を評価することも出来よう。そしてこの論理が，それ以前の完全な貴族による政治独占と比べれば，この地域の民主主義にとって一つの進歩だったということを見逃してはならない[54]。しかし，健全な有機体のために社会団体が，技術教育と愛国心を道徳的な利害として有機体内部の役割に応じて伝達するという論理は，互いに競争しあう自由な個体からなる西欧的ないわゆる自由民主主義の論理とは離れており，それは経済的な民主主義の発達という観点からすれば，この地域の社会観に大きな制約となってしまった。

4 まとめ

このように，プロイセン・ドイツ当局によるポーランド分割とポーランドの民族性抹殺のための政策的な努力は，プロイセン領内のポーランド人について「人は，ただ民族の偉大な家族の一員であると感じているという条件においてのみ，社会的に完全になることができ，その個人の発展は緊密に民族の発展と結びついている[55]」というポーランド人民族運動家たちの社会観をさらに強化することになった。こうした理念に基づきポーランド人が多くの民族的な社会団体を組織し，独自の民

(54) シマンスキの死の直後に，彼が民主主義のために果たした役割は，激しく敵対していた労働運動家からも評価されている。Morawski (1909) s.176-177. もちろんルージャ［ローザ］・ルクセンブルクは，労働者階級への民衆派運動拡大の試みを彼女独特の民族主義への態度から認めていない。こういった彼女の民族主義への態度の原因として，逆に19世紀末の民族主義活動家の民主主義の限界が作用したのだと考えるべきであろう。Rosa Luxemburg, Aus Posen (1974) S.222-225.

(55) Szymański (1870) s.32.

(56) プロイセン領のジャーナリズムについては Ted Kaminski (1985), (1988) を参照せよ。

族的なジャーナリズム[56]を使って，民族意識を高め，組織的にドイツ人と対抗していった。倹約と自助を促進する役割を果たしうる理念のもとで，ポーランド人農民の増加をはかるために，組織的に資金が集められ土地が購入された。さらに都市の中産階級の成長はポーランド社会の全体的な実力を高めるのに大きな意義を持った。そして，もともとドイツの中で最貧の州に属するポーゼン州の状況とこの激しい民族的な対立が，ドイツ人のドイツ西部への流出を加速することになった。ポーランド人の人口の自然増加率がドイツ人を上回っていたこともあいまって，ドイツ人の人口比率は以前とは反対の方向へと，すなわちポーランド人の人口比率の増加の方向へと逆転した。人口のみならず経済的にも，徐々にドイツ人とユダヤ人の圧倒的な優勢という状況は崩されていった[57]。さらに「ポーランド民族の生存権[58]」をかけた争いとして，以前のポーランド共和国の領域の外にある上シロンスクにまで民族闘争の舞台は広がり，19世紀の末には，中央党とポーランド人議員団が，後にはプロイセン領ポーランド社会党とドイツ社会民主党が領域争いをシロンスクで繰り広げることとなった。

さてこの経済観が残した歴史的な影響について考えてみることにしよう。まずドイツ人に対する影響を考えてみよう。ポーランド民族の活発な活動によってドイツ人の経済的な優勢が崩され始めるにつれて，ドイツ人民族主義者は危機感をますます募らせていった。そこで民族差別主義的な団体であるという外部からの非難をかわすために，ポーランド人民族団体に対する自衛的な性格を強調しながら，ドイツ人民族主義者たちも自分たちの民族主義的な団体，「東部国境協会」を1894年にポズナンで組織するに至った。しかし，方向が正反対であったとしても特定の領域内部での民衆の民族性の強化という同じ目的を追求したため，ドイツ人の民族団体は，組織活動のやり方やその原理においてポーランド人のやり方を結局模倣することになった。すなわち組織活動においては，新聞・雑誌あるいは集会を通じて大衆の民族性の強化を目的とした広報宣伝活動をその中心とするという点で，そして組織原理においてはインテリゲンツィア・資本家層の指導を運動の軸とするという点で，ポーランド人のそれと似通った性格を持つに至った。ドイツ人は国家を持ち，遙かに巨大な資本と情報力を有しているだけに，この民族団体の活動の影響は，ポーランド人の民族団体のそれよりもずっと深刻な性格を持っていた[59]。いわゆるドイツ東部の特殊性という問題を考える際に，ポーランド民族運動との激しい民族闘争を考慮に入れるのであれば，こういったポーランド側の民族運動の指導理念との類似性の分析を通じた，さらなる比較・分析が必要であろうと考えられる。

またポーランド人にとってこのような社会観は先に述べたように，明確な民族意識を持つ中産階級を生み出すのに役だったが，それはその後のポーランド社会の政治の質にも影響を残してしまったように思われる。これらの民族的社会団体の経済活動は，ビスマルクのポーランド民族抑圧政策

(57) Łuczak (1960), (1988) ; Trzeciakowski (1964), (1973).
(58) Szymański (1870) s.53.
(59) Janusz Pajewski (1966).

をもドイツ人にとっては正当なものと認めるほどの「民族的エゴイズム」を主張する国民民主党などに引き継がれた。そしてその活動理念は，ポーランド独立後も大きな影響を残し彼らポーランド人が西欧的な民主主義とは異なった性格を持つ国家としての歴史を経験する一因となったと思われる。とりわけ，ドイツ・ポーランド関係に限っていえば，この経済観が新しいポーランド国家内部のドイツ人少数派政策に対して残した影響は深刻であった。

しかしドイツ人のポーランド人との民族闘争における経済思想，そして戦間期のドイツ人・ポーランド人の双方の経済観については，ドイツ民族運動の理念と発展とも視野に入れた議論がさらに必要であろう。ただ，これまでの議論からだけでも，19世紀ドイツ史の中でポーランド民族の主体性を軽視したまま，この時代のドイツ史における彼らの役割をただ後進的な側面だけを代表しているものとみなしてしまってはならないということは，理解されよう。ドイツの政策に対して彼らは少数民族として強要された受動的な役割を拒否し，自らの社会認識に基づいて活発な経済活動を行っていたのである。(60)

参 考 文 献

[一次文献]

Jackowski, Maksymilian (1870a), *Rzut oka na nasze zasady, sprawy i potrzeby*, Poznań.*1

——————— (1870b), *Ułomności nasze narodowe i społeczne oraz środki ku sprostowaniu tychże.* Poznań.*1

Morawski, Franciszek (1909), *Z walki dwóch duchów*, Kraków.*2

Siemianowski, Józef (1908), *Roman Szymański* Poznań.*1

Szymański, Roman (1870), *O siłach moralnych w ustroju społecznym, z powodu Towarzystwa ku wspieraniu Moralnych Interesów Ludności Polskiej pod Panowaniem Pruskim*, Poznań.*1

——————— (1873a), *Pracą i Oswiatą! Odczyt miany dnia 26 maja 1873 r. w uroczystość 25-letniego jubileuszu Towarzystwa Przemysłowego w Poznaniu,* Poznań

——————— (1873b), *Wskazówka systematycznéj agitacji wyborczéj*, Poznań.*1

——————— (1893), *Znaczenie handlu ludowego objaśnione na przykładzie fabryki S. Bendlewicza w Pleszewie*, Poznań.*1

(1908), *Pamiętnik jubileuszowy Towarzystwa Przemysłowego w Poznaniu, 1848-1908,* Poznań.*1

(所蔵) ＊1 Publiczna Biblioteka Miejska im. Raczyńskich w Poznaniu.

＊2 Biblioteka Uniwersytecka w Warszawie.

[二次文献]

Blanke, Richard (1973), Bismarck and the Prussian Polish Policies of 1886. [in :] *Journal of Modern History*, No.45.

——————— (1974), The Development of Loyalism in Prussian Poland, 1886-1890,

(60) 当然のことであるが，分割領ごとの特殊性を無視して，このような経済観をポーランド一般のものとみなすことは出来ない。

[in :] *The Slavonic and East European Review*, No.129.
——— (1977), An "Era of Reconciliation" in German-Polish Relations (1890-1894), [in :] *Slavic Review*, 36-1.
——— (1981), *Prussian Poland in the German Empire (1871-1900)*, New York. East European Monograph # 86.
Broszat, Martin (1972), *Zweihundertjahre deutsche Polenpolitik*, Frankfurt a/M..
Grabski, Władysław Jan (1960) , *300 miast wróciło do Polski*, Warszawa.
Hagen William W. (1972), National Solidarity and Organic Work in Prussian Poland, 1815-1914, [in :] *Journal of Modern History*, 44-1.
——— (1973), The Impact of Economic Modernization on traditional Nationality Relations in Prussian Poland 1815-1914, [in] : *Journal of Social History*, 6-3.
——— (1980), *Germans, Poles, and Jews, The Nationality Conflict in the Prussian East 1772-1914*, Chicago.
Jakóbczyk, Witold (1938), *Patron Jackowski*, Poznań.
——— (1946), *Doktór Marcin, Jan Karol Marcinkowski 1800-1846*, Poznań.
——— [red.] (1954), *Wielkopolska (1851-1914) Wybór źródeł*, Wroclaw.
——— [red.] (1966, 1969), *Wielkopolanie XIX wieku*, t. 1/2, Poznań.
——— (1972), The First Decade of the Prussian Settlement Commission's Activities, 1886-1897, [in :] *The Polish Review*, 17-1.
——— [red.] (1973), *Dzieje Wielkopolski*, t.2, Poznań.
Jaworski, Rudolf (1986), *Handel und Gewerbe in Nationalitätenkampf*, Göttingen, Kritische Studien zur Geschichtswissenschaft # 70.
Kaminski, Ted M. (1985), Franciszek Dobrowolski (1830-1896), Newspaperman and Powerbroker in Prussian Poland, [in :]*Canadian Slavonic Papers*, 27-2.
——— (1988), *Polish Publicists and Prussian Politics (1890-1894)*, Stuttgart, Studien zur modernen Geschichte # 38.
Kizwalter, Tomasz, Skowronek, Jerzy [red.] (1988), *Droga do niepodłeglości czy program defensywny? Praca organiczna—programy i motywy*, Warszawa.
Labuda, Gerard (1971), *Polska granica zachodnia, tysiąc lat dziejów politycznych*, Poznań.
Laubert, Manfred (1942), *Die preßische Polenpolitik von 1772-1914*, Krakau.
Liebich, André (1979), *Selected Writings of August Cieszkowski*, Cambridge.
Luxemburg, Rosa (1974), *Gesammelte Werke* 1/1, Berlin.
Łuczak, Czesław (1960), *Przemysł Wielkopolski w latach 1871-1914*. Poznań.
——— (1988), *Od Bismarka do Hitlera, Polsko-niemieckie stosunki gospodarcze* ,Poznań.
Pajewski, Janusz [red.] (1966), *Dzieje Hakaty*, Poznań.
Polskie Towarzystwo Historyczne, Oddział w Poznaniu (1983), *Wielkopolski słownik biograficzny*, Warszawa · Poznań.
Rosenthal, Harry K. (1969), The Election of Archbishop Stablewski, [in :] *Slavic Review*, No.28.
——— (1971), Rivalry between 'Notables' and 'Townspeople' in Prussian Poland : the First Round, [in :] *The Slavonic and East European Review*, No.114.
——— (1972), Nation or Class : The Bund der Landwirthe and the Poles, [in :] *Australian Journal of Politics and History*, No.7.
——— (1972), The Prussian View of the Pole, the Significance of the Year 1894, [in :] *Polish Review*, 17-1.

Trzeciakowski, Lech (1960), *Polityka polskich klas posiadających w Wielkopolsce w erze Capriviego (1890-1894)*, Poznań.
———— (1964), *Walka o polskość miast Poznańskiego na przełomie XIX i XX wieku*, Poznań.
———— (1967), The Prussian State and the Catholic Church in Prussian Poland, 1871-1914. [in :] *Slavic Review*, 26-4, translated by Stanislaus A. Blejwas.
———— (1970), *Kulturkampf w zaborze pruskim*, Poznań.
———— (1973), *Pod pruskim zaborem 1850-1918*, Poznań.
———— (1990), *The Kulturkampf in Prussian Poland*, New York, East European Monograph # 283, translated by Katarzyna Kretkowska.
Urban, Thomas (1993), *Deutsche in Polen*, München.
Walicki Andrzej (1982), *Philosophy and Romantic Nationalism : the Case of Poland,* London.
———— [red.] (1986), *Zarys dziejów filozofii polskiej 1815-1918*, Warszawa.

[邦語・邦訳文献]
伊藤定良 (1980)「帝国主義形成期ドイツにおけるポーランド人問題」 林基監修『階級闘争の理論と歴史 第3巻 近現代社会における階級闘争』所収 青木書店。
同 (1987a)「ドイツ第二帝政における民族問題」『史潮』新21号 弘文堂。
同 (1987b)『異郷と故郷—ドイツ帝国主義とルール・ポーランド人』 東京大学出版会。
伊東孝之 (1988)『ポーランド現代史』 山川出版社。
加藤房雄 (1990)『ドイツ世襲財産と帝国主義—プロイセン農業・土地問題の史的考察—』 勁草書房。
トマス・リハ 原田哲史他訳 (1992)『ドイツ政治経済学』 ミネルヴァ書房。

(1993-11-11)

[別表] ヘーゲンの推算によるポーゼン州の民族構成 ( ) 内は%

年度	ポーランド人	ドイツ人	ユダヤ人	総計
1825	648,500 (62.9)	318,000 (30.8)	65,000 (6.3)	1,032,000
1849	809,000 (60.7)	448,000 (33.6)	76,800 (5.7)	1,334,000
1871	966,000 (61.0)	556,000 (35.1)	62,000 (3.9)	1,584,000
1890	1,112,650 (63.6)	594,000 (33.9)	44,300 (2.5)	1,752,000
1910	1,352,650 (64.7)	720,000 (34.0)	26,500 (1.3)	2,100,000

出典：William W.Hagen (1980) p.324.

(経済学部研究助手)